

グラントワに赴任して

島根県芸術文化センター

副センター長 足立 誠

「益田のグラントワへ」「澄川センター長をしっかりと補佐して・・・」、今年3月副知事からいただいた異動内示である。ということ、出雲の自宅から益田へ単身赴任。県宿舍の抽選に漏れ、グラントワの高橋顧問のお世話で何とか住むところを確保した次第である。早五ヶ月が過ぎた。

着任早々、大変驚いた事が一つ。私の机の上に可憐な花が。県職員生活も終盤となり、今まで多くの職場を経験したが、こういう環境は初めて。後で聞いたところ、地元ボランティアの皆様方にお世話頂いているとのこと、また、情報発信やイベント時にもお手伝い頂いているとのこと、改めて感謝申し上げます。

ご承知のように、グラントワは、平成十七年十月、美術館と劇場の両方の機能を併せ持つ施設として開館。以来、質の高い芸術文化の提供から石見地域の伝統芸能である石見神楽まで幅広い事業に積極的に取り組む、今年で八年目を迎えた。その間、年平均三十万人、トータル二百七十万人

の方々に来館頂いた。益田市は人口五万人、都会地ではないこの地において、このように多くの方々に来ていただいているのも地元関係者のご支援、ご協力の賜だろう。

グラントワのような文化施設の評価として、「入館者数だけではない」というご意見を拝聴することがある。

解らないでもないが、来て頂いてなんぼの施設だと私は思う。そのためには企画展等の魅力アップ、来館者の傾向を分析した上での適確な広報戦略、複合施設の利点を活かしたホールイベントと美術館企画の融合、などが大切ではなからうか。また、長期的なファン層獲得のために小中学校へのアプローチを強めることも必要だと思ふ。

適宜、ご意見を頂ければありがたい。グラントワは、二年後、平成二十七年には開館十周年という節目を迎える。石見地域の芸術文化拠点として、美術や音楽などの鑑賞機会の提供は勿論のこと、交流人口の拡大や産業の

振興など、地域全体の発展にも重要な役割を担っている。そのことも十分踏まえながら着実に前進していきたい。今後ともよろしく願ひします。



### 季節行事に彩りを

生花ボランティア

島田さつき

「なんと 暑いねえ。」  
気温 30度と聞けば、以前ならとても暑い日に思えたものですが、今は気温 35度だと耳にしても特に驚くことをしない気がします。

暑いか寒いかのどちらかにあつて、涼しいだとか、だんだん暖かいや、少しづつ寒いといった、いわゆる「季節の移ろい」が薄れていると感じるのは私だけでしょうか。

さて、そうした気候の変化と共に、開館8周年のグラントワで、生花グループのボランティア活動は、いつもお花を提示して下さる方と型にはまらないメンバーの良さが協力しています。開館当初、お花を活けて飾ることを、「〇〇さん、お

願ひね。」と言って託したのをきつかけに活動は始まりました。

最近、話の随所や時には紙面において、その活動ぶりが話題にされています。

そして、こうした私の気ままさは、お花の事と同時に、お手洗いや回廊の一角を、行事に合わせた物や、季節に因む物で飾るまでに及んでいません。家に有る物や 100円ショップで見つけたものなど、気兼ねをしない物ばかりです。

8月の美術館企画展「キモノ・ビュティイ」では、ゆかたのミニチュアを飾ってみたかったのですが、残念ながらすることができませんでした。

会員の皆さんの中には、手芸好きな人や、手作りに長けた人がきつとおられるでしょう。

材料や材質は問いませんが、損失や紛失、材料費といった製作に関することに責任は負えませんので、この点を十分ご理解ご承知の上、楽しいと面白いを加えた気軽さをモットーにボランティア活動に参加・協力して下さる方は、是非お願いいたします。

私と一緒に、和みと趣向を取り入れた活動をしていただけませんか。ご希望の方は、グラントワ事務局を通じてお知らせください。次回は、「お月見」をテーマに考えています。たくさんの方からお声かけをお待ちしています。

8月4日「Kimono Beauty」の講義と展覧会を鑑賞した。2、3感想を書きま

す。着物といえは私の母の思い出につながり。明治42年生まれの母は着物を常に着ていた。自分で縫ったりもしていた。しかし夏は簡単服であった。彼女から着物の布地には、羽二重、綸子、ちりめん、塩瀬、銘仙、紗、等等、そして、帯の布地、つづれ織り、緞子、紬等があることを私の娘時代に、世間話のように話して聞かせた。この人は私の周りにいる人のなかで、着物の第1人者だと感心していた。その母をふと思いついた。

さて、今回の展覧会の中心は明治時代にボストンに渡った紅輪地松笹扇地紙模様打掛（江戸時代の物）他11点が里帰りした展示品である。初めて帰郷ということもあり、モノづくの至宝に触れ圧倒される思いであった。アメリカで丁寧に保存されていたからこそ、こうやって再び日本人に着物を芸術の高さまでにあげたのかなと思う。

丁度、この夕澄川喜一先生を囲んでのボランティア会が開催、先生は「最近の若い人はモノづくり（ご自分の手を示されて）しないからなあ」とおっしゃった。私の小学生のおり家庭科で運針2枚または2枚以上の布をあわせて、表裏とも木綿は3×4ミリメートルでまっすぐ縫う練習があった。これはまず手仕事の基本だったのか

と思いついた。

こん会、着物の柄、模様は大正時代には、気だった。ヨーロッパの風景、西洋的なモチーフ、昭和初期にはアーデルデコのデザインを反映した幾何学的な模様が、着物の図に現れたことを学んだ。私達は西欧風なものに憧れていたのだ。私の好きな言葉、金子みすずの詩「星とたんぽぽ」見えぬけれどもあるんだよ 見えぬものでもあるんだよ」の句のように。いろいろなものが一つにつながっているのだ。和風と洋風の調和のように。この展覧会をおして、ものづくり大切さを感じた。また、懐かしいいろいろなことを思い出して大変良い企画の展覧会だった。また、講義には4、5人の着物姿の受講者を見受けそれがまた華を添えていい雰囲気だった。



グラントワ縁日賑わう

情報ボランティア

飯塚 哲也

お盆の三日間（八月十三、十四、十五日）中庭広場でメインステージでのイベントと夏にふさわしい数々のお店が並びました。猛暑のさなかでしたが、夕方から大勢の来客がありました。特に十三日には、五〇〇名を超える人出があり、見て、飲んで、食べてそして用意された「うちわ」でしばしの涼をとりました。

縁日はビール、ソフトドリンク、氷、食べ物、などたくさんのお店ができました。子供たちに好評の「わたがし」「よーよー」など昔の縁日を思い起こしました。

十三日のメインステージは「いわみダンスプロジェクト」（MYZとZENITY）若い人中心の軽快なダンス、音楽、照明で真夏の夜舞台を飾りました。暑さやストレス解消に役立てたでしょうか。たくさんのお客様でした。十四日は「愛でる」時代を受け継ぐ子供たちの舞「それは子供神楽でした。

中庭に舞舞台が準備され、まだ日の高い時間でしたが元気な子供たちの姿がありました。おなじみの「大蛇」が最後に披露され、大蛇退治の場面は感動でした。暑い中ご苦勞様でした。

十五日は、やや強い夕立があり急きよ会場が「大ホール」に変わり、「送り火コンサート」がありました。屋外の雰囲気と違い涼しい会場でコーラスやダンスなどを楽しみました。

幕間にはロビーで 縁日を家族で楽しんでいました。



お盆には「グラントワ」でを合言葉に、じいちゃんも、ばあちゃんも、子供たちも、家族そろって出かけましょう。来年も楽しみにしています。

「縁日が猛暑猛暑を吹き飛ばす」

あ と が き

4年前、アメリカはヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて、日本人で初めて優勝し、以後国際的活躍を続ける辻井伸行さんのリサイタルが12月1日(日)、大ホールで開催されます。およそ8年前「グラントワ」オープン記念での梯剛之さんや、記憶に新しい小山実稚恵さんに続いてのピアノ・コンサートです。

演奏曲目は前半がショパンの「ノクターン」から他、後半はリストの「愛の夢」などです。映画「神様のカルテ」のテーマ曲など、作曲家としても知られる辻井さんのライブは、全国で人気を博しており、チケットは早々に完売が予想されます。グラントワはピアノがとても美しく響くホールですので、是非、友の会会員・チケット先行予約に応募し、名曲の数々を楽しみたいものです。当選、そしてお気に入りの席で聴ければいいですね。

(陽窃)